大人の学生への期待

佐藤有耕
心理学系講師

1．大人の入学状況

「どうしておなかの大きな学生がいないの？」，私が院生の時，ブラジルからの留学生がこんなことを言いました。いるわけないよと，当時は不思議に思いました。しかし，その後の自分の教員生活の中では，社会人学生の結婚や産休もありました。子ども連れの入学式や，教室の後ろにベビーカーの赤ちゃんが寝ている光景も目にしました。大学は若い人だけの場ではなくなっています。

大人が中学や高校に入り直したことが，時々報道されます。まだ珍しいからマスコミが取り上げるのでしょうが，大学はさすがに進んでいて，大人の入学が定員化されている場合があります。また，一般の受験で入学してくるがんばり屋の大人もいます。

多くの大学が，生涯学習やリカレント教育に取り組みはじめています。思惑や動機はどうあれ，大人が大学に来てくれるのは，良いことだと思います。これからは，有名国立大など見識の高い大学も，どんどん社会人入試枠を設定してくれるとありがたいと思います。できれば，大学院ではなく，学部への入学を期待しています。社会人入学者による学校全体への教育的効果を期待するからです。

2．大人がいることの教育的効果

大人が学生として教室にいると，大教室でも雰囲気が少し変わります。学生は前列中央に座りたがりませんが，大人の学生はそこに座っています。勤勉なせいで，同級生たちから少し浮きそうな子が，大人の学生と一緒に座っていることもあります。

自己資金で授業料をまかなっているせいでしょうか，大人は授業に対して貪欲です。熱心でない教員や，休講は好みません。“勉強したくてここへ来た”というその姿勢は，若い学生にも伝わりま

す。何となく大学に来たような学生には，とても刺激になるようです。そこまでして大学で勉強したいという人の存在を前にすると，学生たちは自ずと自分の生活ぶりを振り返ることになります。貴重な時間をムダに使っているのかもしれない，そんなことを思う学生もあらわれます。ただし，そういう貪欲さを若い学生から煙たがられることもあります。大人としての錬れ加減のたりない場合には，そういうトラブルが起きることもあります。

授業の理解度となると，概して大人の学生よりも，授業慣れした若い学生の方が有利かもしれません。しかし，大人の学生はそもそも熱心ですから，予習復習でカバーしたり，教員に質問したり，同級生に教えてもらったりしながら，学生として無事に成長していきます。そして，若い同級生から勉強を教えてもらう代わりに，彼らの相談にのってあげたり，大人の常識を教えてあげたりしていました。知識を持っている若い学生と，人生を知っている大人の学生とは，お互いの得意分野で相手を支え，自分の苦手分野では相手に支えてもらい，いつしか良い友情関係が芽生えていくようでした。同じ専攻で学ぶ学生同士という身近さがあるので，心が通じやすいのです。

大学生活の価値を若い学生に気づかせてくれる，若い学生の心を支えてくれる，と書きましたが，もう一つ大きな貢献があります。それは，教員の気を引き締めさせるという効果です。

実際には，大人である学生諸氏が，教員に対して面と向かって抗議することはほとんどありませんでした。しかし，私の経験では，休講の多い教員に対する不満や，オムニバス方式の講義に対して授業の一貫性に欠けるという不満が寄せられたことはありました。また，講義中にたびたび行われるアンケート調査（卒論・修論など）への不満や回答拒否も見られました。

多くの若い学生は，教員から与えられた授業内容を，そのまま受け入れてくれます。それは，大学の講義に期待していないためかもしれませんが，教員がそれに安住するのは危険だと思います。私自身も，教員となって3年目の頃に，授業の進め方について，苦言をいただいたことがありました。それは，ある概念の定義をいくつか板書して説明した時のことでした。大人の学生がノートを持ってやって来ました。そして，今日の90分の講義ではノート半分しか書き留めておくべき内容がなかった，このような内容の薄い授業であるのは残念だ，ということを言われました。内容が薄いという点に

ついては思い当たる節もありましたので，今後は善処したい旨を伝えました。今でもその時のことはよく覚えています。この出来事のおかげで，この講義の準備にはさらに時間をかけることになりました。大人の学生が講義を見守っていてくれることは，緊張もしますし，負担でもありますが，自分の講義を研鑽する場にもなります。大人の学生が講義内容にうなずいてくれる時には，なぜかホッとします。大人の学生は，教壇から視線を向けても目を反らすことが少ないので，教員の支えでもあります。

3．学校に教員以外の大人の力を

学校は，もっと教員以外の大人の力を借りても良いのではないでしょうか。具体的に言うと，小学校から大学までの学校は，もっと教室の中に大人を入れても良いのではないかと思っています。時折，子どもの人権を無視したような事件がマスコミで報道されることがあります。それは，教室の中に教員以外の大人がいれば防げたかもしれません。そして，生徒や学生の側に大人がいることの方が，教員が複数配置される以上に教育的な効果が期待できるような気がします。

時には，クラス全体が大人の学生に甘えてしまい，クラスのまとめ役を大人の学生に任せてしまうような弊害も出るかもしれません。また，教員が若い場合には，教員の側が遠慮したり萎縮したりするかもしれません。しかし，そこは立場の違いが教員を守るでしょうし，教員の側がリーダーシップを発揮して指導していくことで，解決できそうです。年齢が上だから教員が務まるのではなく，教員としての力量があるから教員が務まるのだという認識を形成するには，大人の生徒や学生に揉まれることは，とても良いことのような気がします。

とは言うものの，大人の学生は，教員や大学教育を支えるために入学するわけではありません。あくまでも，自分の人生のためです。大人がいったん自分の仕事を辞め，本気で大学に入ってくることは，人生の大きな賭けに見えます。大きな人生の転換であり，安易に勧めるつもりは毛頭ありません。しかし，それでも入学してくれる大人の学生がいるのなら，彼らの願いにかなうような講義を準備しなければならないと思います。

覚悟を決めた大人の学生が入学してくることには，大学を動かす力があるように思います。学校は，もう少し教員以外の大人の力を借りても良いのではないでしょうか。

（さとうゆうこう　青年心理学）